

伊丹福音ルーテル教会 四旬節第四主日礼拝のしおり

2022年3月27日

前奏

招きのことば：詩編 32 編 1-2, 5-7, 10-11 節

いかに幸いなことでしょう 背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。
いかに幸いなことでしょう 主に咎を数えられず、心に欺きのない人は。 |
わたしは罪をあなたに示し 咎を隠しませんでした。
わたしは言いました「主にわたしの背きを告白しよう」と。
そのとき、あなたはわたしの罪と過ちを 赦してくださいました。〔セラ |
神に従う人よ、主によって喜び躍れ。すべて心の正しい人よ、喜びの声をあげよ。〕

罪の悔い改めと赦しのことば

会衆： 私たちは生まれつき、自分中心、わがままで、心の中に本当の愛のかけらもありません。思いとことばと行いで、まことの神を軽んじて、となりびとにも愛のない、神の御前に罪人です。神様、ほんとうにごめんなさい。

私たちは祈ります。私たちを救うため あなたがお与えくださった イエス・キリストによって、どうかあわれんでください。アーメン。（短い黙祷を持ちましょう）

牧師： 何でもおできになる神様は、あなたのすべての罪を赦すために、そのひとり子、イエス・キリストを十字架の上で死に渡してくださいました。ですから神様の御言葉をとりつぐ務めに任じられた牧師として、今、あなたがたに宣言 します。父と、御子と、聖霊のお名前によって、あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。**アーメン。**

使徒信条

われは、天地のつくり主、父なる全能の神を信ず。

われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりて宿り、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死して葬られ、

陰府(よみ)にくだり、三日目によみがえり、天にのぼり、父なる全能の神の右に座したまえり。生ける人と死にたる人とを審かんがため、かしこより再びきたりたまわん。

我は聖霊を信ず、また、聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、限りなきいのちを信ず。 アーメン。

祈り

愛とあわれみに満ちておられる 私たちの父なる神様、心から感謝をいたします。今朝も共に礼拝にあずかり、罪の赦しをいただき、新しいいのちをいただいて 一週間を始めます。

イエス様は私たちのために苦しみをしのび、私たちの代わりに十字架で死んでくださいました。神様のもとを離れて自由に生きようとして、かえって罪の力に圧倒されて息苦しさと不自由さに閉じ込められていることがあります。また、神様のもとにとどまっていると思っているのに、はつらつとした息吹や喜びを失っているときもあります。あなたは変わらない愛をもって私たちに語り掛け、イエス様によって罪を赦して新しい命にみなぎらせてくださいます。

新型コロナ・ウィルスの感染拡大を防ぐために、緊張感を保たなければなりません。その中でも 御手にゆだね安心して、あなたの子どもとして 生き生きと生きる日々を与えてください。

この祈りを、私たちの救い主であり 主である イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 **アーメン**

使徒書朗読：第2コリント5章16-21節

それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。ですから、神がわたしたちを通して勤めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。

福音書朗読：ルカによる福音書15章1-3節, 11b-32節

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。

そこで、イエスは次のたとえを話された。 |

「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物を与える人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところ

では、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』

讚美歌 313 番

- 1 信仰こそ旅路を導く杖 弱きを強むる力なれや
心 勇ましく旅を続け行かん この世の危うき 恐るべしや
- 2 わが主を頭と 仰ぎ見れば 力の泉は 湧きて尽きず
恵み深き主の御傷 見まつれば わずかに残る火 再び燃ゆ
- 3 主イエスの御跡を たどり行けば 険しき山路も 安けきみち
いかで迷うべき などで疲るべき ますぐに御神へ 近づきゆかん
- 4 信仰をぞ わが身の杖と頼まん するとき剣も くらぶべしや
代々の聖徒らを 強く生かしたる 御霊を我にも与えたまえ アーメン

説教：「いつもわたしと一緒にいる」

私たちの父なる神様と御子イエス・キリストから、恵みと平安が豊かにありますように祈りつつ、御言葉をとりつぎます。

教会の暦は四旬節第四主日です。四旬節にはイエス様がわたしたちの罪を赦すために苦しんで十字架に向かってくださったことを少しずつ覚えています。

イエス様はすべての人々の罪を赦すために苦しみを味わってくださいました。すべての人です。世の中には、自分は罪びとではない、と思っている人がいます。また、反対に自分は赦されるべきではない大きな罪びとだと自覚している人もいます。イエス様はその両方の人々のために、すなわち、すべての人の罪を赦すために苦しみを味わってくださいました。

ファリサイ派の人々や律法学者たちはイエス様を厳しく非難しました。当時の社会で罪びとと呼ばれていた人々に信頼されて、彼らがイエス様のお話を喜んで聞きに来ていたからです。ごく親しい人とでなければ食事をともにすることはなかった時代に、イエス様は社会の隅に追いやられている徴税人や罪びとと呼ばれる人々と食事まで一緒にすることを批判していました。

一方、ファリサイ派の人々や律法学者は、自分たちは普通よりもよい人間なので、神様からの怒りや裁きを受けることはない、と考えていました。罪びとと呼ばれる人々とは一線を画して、彼らのような罪にまみれた人々を忌み嫌っていました。

徴税人や罪びとと呼ばれる人々は、自分たちはパリサイ派の人々からも非難を受け、人々の間でも後ろめたい、恥ずかしい生活をしていました。自分たちは神様に罪を赦されることは期待すらしていませんでした。自分の生活を全面的に正して、善行に熱心に励み、これまでの罪を償うために努力に努力を重ねると、あるいは赦される可能性が出てくるかもしれないけれど、そういうことはそもそも自分たちにはできないことだとどこかでわかまえている人々です。

イエス様はどちらの人々のためにも苦しみを味わってくださいました。どんな苦しみでしょうか。口先だけの愛ややさしさではない、どんな真実な犠牲と覚悟をお持ちだったのでしょうか。

イエス様は徴税人や罪びとと呼ばれる人々と一緒に食事をしました。これを知ったファリサイ派や律法学者はイエス様を批判しました。そこでイエス様は三つのたとえ話をなさいました。その三つ目のものが今朝一緒に聞いた、「放蕩息子のたとえ」として親しまれているお話です。

このお話の内容を知ると、弟息子が放蕩息子だった、というお話ではなくて、ふたりの息子を両方大切にされた父親のお話と言えるのではないのでしょうか。

まずは弟息子です。彼は徴税人や罪びとと呼ばれる人をあらわしています。お父さんが死ぬ前に遺産を要求し、すぐに旅立って自分の好きなところで、自分の好きなように生きました。場所だけでなく、心も、お父さんから遠く離れていました。しばらくは楽しみました。しかし、お金が底をつき、友人が離れていき、その地方を飢饉が襲ったとき、彼は食べるものも、助けてくれる人もない、ひもじくわびしい生活に転落しました。私たちから見ると、自業自得に見えるのですが、彼はそこで我に返って自分と話しています。このままでは死んでしまう。すべての原因は私が父のもとから離れたことだ。そうだ、すぐに帰ろう。もう息子として迎えられ

ることは期待できないし、しもべのひとりとしても受け入れられるかどうかもわからないが、こうなったら悔い改めてお父さんの愛にすぎることしか残されていない。

飲まず食わずで体力はなく、後悔と惨めさと恥ずかしさで、父にも父の家の人々にも合わせる顔はないのですが、彼はとぼとぼと父の家への旅路をたどりました。しかしまだ遠く離れているのに父は彼の姿に気が付いて、走り寄ります。当時は一家の主人はゆっくり歩くのが普通で、何があってもはしたなく走るということはありませんでした。父はわき目も降らず息子のもとへ走り寄り、崩れそうな彼をしっかり抱きとめて、家へと導き入れます。弟息子にとっては全く予想外のことでした。父親に受け止められながら、彼はぼそぼそとお詫びとお願いをします。父はそのことばを最後まで言わせることなく、喜びに満ちて、自由人としての履物と、財産の相続権を持つ子供であることのしるしである指輪と、まっさらの服を用意して迎えました。

弟息子は罪深い自分の姿に失望しました。父の束縛から逃れて自分中心に生きることが人生の喜びとっていました。しかし本当は父のもとに生きることのできる居場所がありました。父の威厳と優しさに包まれて、人々とも個性をもって高めあう豊かな交流がありました。そのような中でいのちはぐんぐん成長するのです。弟息子は体験しました。父のもとから離れていくことが彼の罪であったということです。自己実現ができ、体も、心も健やかで、経済的にも、社会的にも、人間関係においてもなんの苦勞もなく歩んでいるとき、気が付かなかったのです。父から離れてしまった結果、人の世でプライドを保つことができずに引け目を感じ、人の世の冷たさに打ちひしがれ、不運な惨めさを何度も体験しました。そして、体力的にも自分を守り切ることができないとき、本心に立ち返って、魂の故郷を思い出したのです。残念ながら、人はこのような経験をしないと、自分が父なる神様から離れたどうしようもない罪深い者であることに気づかないでいることが多いですね。

私たちもそうです。神様に造られた私たちは神様のもとでいきいき生きる居場所があります。神様は私たちを自己中心で自分本位の夢を求めるためにではなく、人々の役に立つように、人々と一緒に幸せを作っていく尊い人生を与えてくださっています。神様に与えられている自分の立場をもって、与えられている個性を生かし、またよく磨いて、自分らしく人々に仕えていくところに生きがいがあります。まず、今自分に与えられている使命は何かをよく理解します。誰に対して何をさせていただくことを任せられているのか。みんなと一緒にどんな幸せを作っていけばいいのかをよく考えることはわくわくすることです。予想できる様々な困難や課題をみんなの成長につながる形で乗り越えていくためにはどうすればいいのか、神様は教えてください。祈りながら知恵を絞りましょう。いろんな個性や考え方を持っている隣り人たちと、いっしょに、生きがいを持って進んで行けるように、励ましあって前進していきます。人と比べて優越感にひたったり、劣等感に打ちひしがれている暇はありません。自分の力が足りなくて十分に人の役に立てないのなら、謙遜に学びましょう、助けてくださる方と手分けをしましょう、別の方法で幸せを実現しましょう。利益を分かち合いましょう。家庭で、職場で、近隣

で、教会で、神様から自分に与えられている使命を見つけましょう。どのようにして人々に仕えていくことでしょうか。自分も含めて、罪深い自分中心な人々の間で、私たちは神様に罪赦されて大切にされているのですから、人々からの感謝や尊敬を期待して自分を守らなくてもよいのです。安心して人々に感謝をし、尊敬をして、力を尽くして人の役に立ちましょう。

しかしお父さんの姿は弟息子を日々覚えて帰ってくることを願って待っていた姿です。顔も上げないでとぼとぼ歩く息子の姿を地平線上に見つけて走り寄っていきました。これまでのことをすべて赦して、あらためて跡取り息子の一人として喜んで家に迎え入れました。それはいなくなった息子が帰ってきた、死んだ息子が生き返った、父の喜びの日でした。イエス様は徴税人や罪びとと呼ばれる人々のために苦しんで十字架について死んでくださいます。息子を迎えるために恥を捨て、体に鞭打って走り寄る父の姿は、私たちのために辱めを受けて死んでくださったイエス様の姿と重なります。

しかしもう一人、兄息子がいました。兄息子は自分は赦されなければならない罪びとは違うと思っていたファリサイ派の人、律法学者たちを表しています。イエス様はこの物語をファリサイ派と律法学者のために語っています。兄は弟が帰ってきたこと、そして父が家を捨てた弟に対して罰を与えるどころか宴会を催して受け入れ喜んで歓迎したことに驚きました。自分がこれまで家にいたのにそんな宴会は開いてくれなかった、とすねています。弟のように羽目をはずさず、自分の思いを抑え続けて父の家で黙々と働いてきたことがまったく報いられていないと感じました。その微妙な気持ち、弟が帰ってきたことはよかったかもしれないけど、私のことはどうなるのですか、とお父さんに訴えたいような、複雑な気持ちがわかります。

弟には走り寄って迎えた父は、兄息子が起こって家に入らないことを知っていて、兄息子のところに出てきてくれました。そして、兄の気持ちを聞いてくれました。弟のことを「あなたの息子」と呼んでひがんでいる兄の思いを父はすべて聞いて受けとめています。あなたもわたしの大切な子どもだ。これまで私のものはすべてあなたに与えてきた。「あなたの弟」が帰って来たのだから共に喜ぼうではないか、と誘っています。これまで自分の罪に打ちひしがれてきた徴税人や罪びとたちがイエス様に立ち返って、イエス様に信頼して歩んでいる。自分は悔い改めなくてもよいと思って自分の罪に気付いていない自分中心な兄をも、父は弟と同じように、大切にしてきました。イエス様はファリサイ人や律法学者のためにも苦しんで、十字架で死んでくださいました。それは自分は弟のような罪びとではないと思って弟を責め蔑んでいた彼らを赦して、神様の子どもとして迎えるためだったのです。イエス様はこのお話のすべてを、ファリサイ人と律法学者を大切に思って彼らのために語ってくださったのです。

イエス様はすべての人の罪の赦しのために苦しんでくださいました。自分は罪びとではないと思っている人のためにも、自分の罪は赦されることはないと思っている人のためにも、すべての人のために十字架の苦しみを受けてくださいました。この一週間、イエス様を信じて感謝を

して、家庭で、社会で、そして教会で、人々を赦し、人々に仕え、人々とともに幸せを創ってまいりましょう。

すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。 ルカによる福音書 15章 31節』

人知をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってください。アーメン

讃美歌 270番 献金 献金感謝の祈り

- 1 信仰こそ旅路を 導く杖 弱きを強むる かなれや
心勇ましく 旅を続け行ゆかん この世の危あやうき 恐るべしや
- 2 わが主を頭(かしら)と 仰ぎ見れば 力の泉は 湧きて尽きず
恵み深き主の 御傷(みきず) 見まつれば わずかに残る火 再び燃もゆ
- 3 主イエスの御跡(みあと)を たどり行けば 険しき山路(やまじ)も 安けき道
いかで迷うべき などて疲つかるべき 真直(ますぐ)に御神へ 近づき行かん
- 4 信仰をぞわが身の 杖と頼まん 鋭どき剣(つるぎ)も 比ぶべしや
代々の聖徒らを 強く生かしたる 御霊をわれにも 与えたまえ **アーメン**

主の祈り

天にましますわれらの父よ、願わくはみ名をあがめさせたまえ。みくにを来たせたまえ。
みこころの天になるごとく地にもならせたまえ。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。
われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。
われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。
国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。

頌栄：讃美歌 543番

主イエスの恵みよ、父の愛よ、御霊の力よ、ああ御栄えよ **アーメン**

祝福の言葉

仰ぎこいねがわくは、私たちの主、イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しきお交わりが、御前に集う一同とともに、今日も、この一週間も、いく久しくとこしえまでも、豊かにありますように。 **アーメン**

後奏